



RNC 西日本放送ラジオ番組

## CHIT CHAT RADIO 子育てCHAT ROOM

2020年12月15日 13時21分～13時43分

子どもの「うざい」が出たら成長のサイン！見直そう親子関係！

—このコーナーではリスナーの皆さんから届いたお悩みに鈴木先生にお答えいただけます。まずは亀谷さんからメッセージの紹介をお願いします。

—丸亀市にお住まいの甘栗さんからメッセージいただいております。

「ちょっとした悩みなんですけど、最近息子と娘から「ママ、うざい」と言われることが増えてきました。小学校高学年の年子なのですが、子どものことが気になって仕方がなくて、テレビを見ている子どもたちも「それ、何見ているの？」とか、「学校で何流行ってるの？」とか、ちょっと様子がおかしいと、「何かあったら相談してよー」とかいついっい声をかけてしまっんです。夫からも、「もう良い歳なんだからほっといてやれ」と言われるのですが、なんだか気になって声をかけてしまいます。自分でも構いますけども思っているのですが、やっぱりもう少し距離を置いてあげた方がいいんじゃないでしょうか？先生やパーソナリティーさんの意見を伺えればと思います。

—「うざい」って、息子と娘が「ママ、うざい」と言われるの「うざい」ですが、お母さんは、傷ついたり言葉ですすまぬ。

私も言われたことがありますよ。

—先生もですか？

あるある(笑)

—京子さんのところはもうちょうと先ですね。言っのが決まってるみたいと言ってしまいました(笑)

—いずれ言われるんだろっと思いましたが、最初言われると衝撃はあるでしょうね。小学校高学年くらいになると、親の言葉ひとつひとつがちょっと鬱陶しいなと感じるのは、自分の世界ができあがってくると、うざいかな。

そうですね。思春期になって自分の世界ができるということとは、かたむりの殻がでける感じかなと思います。自分の家みたいなのが後ろにできて、よーって顔を出すんだけど、鬱陶しいことを言われたりすると、しゅーって中に入っちゃ

う。思春期前は殻がないナメクジみたいな状態で、「ママ〜パパ〜」って無防備な感じだけど、だんだん自分の世界（殻）ができてきますよね。

— 小学校の中学年と高学年では全然違いますよね。

— 「二三年前は、「ママ〜」んなことがあったんだよ」「とか、「ママ、ママ」と構ってほじがっていた印象が親には残っていますから、急に距離を取られ始める的可感しますよね。

— 親の方としては子どもの変化についていけずに数年〜ちょっと前のお子さんの像が残っていますよね。

そうですね、いつまでもオムツしてた小さい頃のイメージがありますよね。

— トイレにまでハイハイで追いかけてきて「ママ〜」って言ったのについて思い出話を出しがちですけど、距離感が難しい年頃の声かけの仕方でも悩まれる親御さんって多いと思います。話が聞きたいときは、どんなふうにしたらいいでしょうか。

「何見てんの」と聞くのは関心を示しているわけなんですけど、子どもからすると親にチエックされてるような気になるのかもかもしれません。友達のことや自分の周りのことを確認して把握しようとしているとか悪く取っちゃったりするんですね。殻ができてからの聴き方としては、例えば「面白そうなの？」とか「楽しそうだね」なべ、その子を確認する前向きな言葉をまず言うのが大事です。いきなり「何見てんの」「じゃなくって」一言クッションがあるといいですよ。

— なるほど。「これ面白そうだね。今、流行ってるのっ」と聞かれたらスッと入ってきます。

— 一言それがあるのじゃないのでは、受け取り方が違うと思います。

— いろいろな対処法があると思うんですけど、僕は甘栗さんのメッセージもほんとに悩んで送ってきたんだけど、わたしがわかりますし、お子さんにちゃんと目が行いているというところでは、母親としてこの愛情がちゃんとあるという事で決して間違っていないですよ。ただ、小学校高学年から中学生にかけての時期にどう接すればいいのかという、その辺のノウハウを今日聞ければ、向き合い方が楽になるんじゃないかと思っています。

そうですね。思春期になったら、子どもから来るまでは行かないっていうのが一番いい。話したい時は話しかけてきますよ。話は聞いてもらいたいけれど、子どもがそっしてほしい時だ

けにしてほしい。話したいけど鬱陶しくいろいろ言いつて構ってほしくはない。甘えたいけど親からベタベタしてほしくない。自分が望んだ時にだけしてほじつてほしいのがある。

—猫ちゃんみたい(笑)

—そうですね。でも親とつてはほんのり甘えなつていいかな。

待ってないといけないんです。

—くるまでまどうホトトギス、家康みたいに来るまでドンとかまえとかないといけないんです。

だから、こつという時期が来たら自分の世界を親が楽しみ始めて構わないと思います。仕事にしろ、趣味にしろ、どんどん自分で世界を広げていっていいんです。子どものためにだけ、いろいろしてあげる時期ではなくなつてきます。

—これはすごく大きなポイントですね。それまではやりたいことがあつても、子ども一番で我慢していた部分もあつたと思います。お母さんがどんどん趣味とか楽しんでる姿みたらお子さんも「あ、なんかかっこいい。僕のこととも相手してよ」と思つかもきれないですね。

そうですね。もちろん高学年とか中学になったら、塾の送迎などの用事がありますが、小さな頃と違つてつきっきりの世話はもつないですね。ご飯や洗濯などの最低限の事だけで。自分の人生は百年ありますから、子育てはその二割ですね。あとは自分の人生に戻つて、楽しむでいいんじゃないかな。で、向こつが求めてきたときに話を聞く、求めてきたときに一緒に楽しむ。

—そこはちゃんと答えてあげないとですね。

それは大事なことです。

—おそろしく甘栗さんは、子どもが悩んでるじやないかなつて探つてあげて、前もつて辛くならないようにと、すごく愛情深いお母様だと思います。思春期つて非常に難しい、親と全然話さなくなるとかいろんな情報聞へので、前もつてできることをやっていきたいなつて思う気持ち、わかるんですね。辛い思いしたら嫌だなとか、困つたことがあつたらすべ、手を差し伸べてあげたいなとか。だから会話の中でポイントをつかみたいなあなんて思つて聞いちゃうんですね。でも逆に言わなくなつたりするものですか。



―なるほど、なりつつありますね。(笑)

イライラと恨みつらみが爆発してくるんですね。自分ばかりって。

―私、このシーズンずっと主演女優です。(笑)

―わかってくれない。「いついつのは辛い」とで心の叫びだと思っのますが、思春期のお子さんには酷ですけど、例えば「ママ、うう」と言わず、「僕はこう思っているの」「う言われたら自分でできなくなるから、ママママとちょっと距離置いて」「う言っのことができたしたら母親は理解できますよね。それが言えないのべ」「うなっしてしまっのますよね。」

そういつ「コミュニケーションの取り方ができたらいいですよね。」

―「ママ、うう」「＝今の言葉としてお母さんが受け取れたら、悩まなくて済むだろうし、ご主人の「ほっとしてやれ」っていうのは「もう大人なんだから、子どもたちにちょっと任せてみようか」という言い方になれば、お母さんはおそらく「あーそうだね、夫婦で見守ろうか」というふうになりますよね。」

そうですね。言葉って大事ですね。プラスで「今後は僕のこと見てくれみたいな」気持ちがあるのかもしれないね。

―そろそろ自分にかまってもううてもいいんじゃないかって。

夫婦の時間を大事にしたいって言うことかもしれないですね。みんな言葉が足りないんですよね。

―だけど人間だからこうなりますよね。特に家族は遠慮しないですから。ちなみに先生はお子さんから「ママ、うう」と言われてなんと返したんですか？

絶句ですよ(笑)

―先生も？

思い返すと、やっぱりううだったのかなって思います。「これしろ、あれしろってやっぱり言ひすぎたのかなあって思ったり。息子は高校の時「俺、思春期だから、こうやってイライラ

しちゃう時期だから、流していいー!」って言って、言いたい放題言っていました。そんなんだ、思春期だから仕方ないかって。

—それが言えたらちょっとは納得できますよね。でも、思ってもなかなか言えないですよ。

親子でよく喋るので、言い方がきついんだけど自分でわかるんだと思います。私が絶句して、しゅんってなると「気にしないで、思春期だからー!」ってね。

—男の子がお一人、お二人が女の子ですよ。女の子はどのですか？

女の子…

—ちょっと今言葉から滲み出てることありましたね。(笑)

女の子はいろんな種類やバージョンがありますよね。一人はもうぴたっと口をきかきかなくなりました。もういつも不機嫌っていう感じで。うざいも言ってもうえない。

—全身から話しかけないでと発しているわけですね！

そうですね。「あんた達、鬱陶しいですよ」というオーラが滲み出てるタイプと、そういう(思春期真っただ中の)二人をみてお母さんかわいそうだなって気遣う妹と。本当は思春期らしくふるまうのが大事だなと思うんですけど、それを遠慮して出せなかったのはかわいそうだったなと思います。

—でも、もう全身から「話しかけないで」って出てる場合は、聞きたいこととか聞けないですよ。私も下の子がまだ三歳ですけれども、すでに女子ですからね。同性でぶつかるとっていう経験をすでにしているのだから、この子が大きくなってきたら、もっとぶつかるんだろうなああっていう予想ができます。(笑)

—「ぶつかり劇場」ですね。(笑)

—もう「ぶつかり稽古」です。(笑)

—お相撲さんみたいですね(笑)。甘栗さん、鈴木先生でもやっぱそういう経験はあるという事ですね。先生、何かメッセージのようなものありますか。「ここだけは気を付けた方がいいこと」とかなんか。

そうですね、子どもが話して欲しいって思う時に、しっかりと向き合ってあげたらいいかなと思います。案外、家事で忙しくて話しかけられてることに気づかなかったり、ちょっとスルーしちゃったり、「後で」って言ったり、生返事したりして、しっかりと向き合えないことも多いですね。思春期の子どもが殻を抜け出して、ちょっと顔を見せてくれたときには、「しっかりと目を見て、話を聞く」っていうのが大事ですね。その時が来るまでは自分のことこそ懸念取り組んだり、楽しんだらいいと思います。

—ちょっと距離は取るけど、心の距離は近づいても近いことじゃないですか。

子どもはわかります。

—そうですね。自分に回らなくても近づかれる「ツギ」ってなっちゃうけど、思いつれてるのは、絶対愛情として伝わってるはずですか？

「見守る」と「放置する」ってのは違うんですね。放置する、放っておくと「ツギ」は、子どもに全く関心がなくなる、毒ってやつも「植手をこなす」「ツギ」は「見守る」ってツギのは、子どもに関心があっても、毒ってやつは「ツギ」で対峙する「ツギ」なんです。子どもも「見守りもツギ」の意味では同じものに見えます。

—小さい頃はお子さんを母親がなんとかしても自分で「ツギ」ということでしたが、大きくなったら「見守る」という字を引けて「見守る」って替えてくると良いのかもじゃありませんか。

—今日も参考になる話をいろいろしてくださいましたが、2020年最後の子育てチャットルームになってしまいました。また来年もいろんな悩みにお答えいただけたらと思います。

—来年も引き続きよろしくお願いいたします。甘栗さんもありがとうございました。また来年も楽しみにしております。鈴木先生、ありがとうございました。

ありがとうございました。